写

令和６年３月１４日

久喜市教育長　　柿沼光夫　様

久喜市社会教育委員委員長
久喜市社会教育委員協議会委員長
金子雄司

今後の久喜市の青年(青少年)教育・青年(青少年)活動の推進について（提言）

世の中が落ち着き始めた昭和３０年前後から我が国では、これからの国づくり・地域づくりを進めていく上で、若者の発想力行動力等を大いに活かすことが最重要であるという共通認識がありました。

そして全国的に、従来あった組織の再生や活性化、時代に呼応した新組織の誕生等、青年団や４Ｈクラブなどの団体が活動を進めてきました。また、職場や職域で結成された青年組織等の活動も見られるようになりました。

この活動は年々参加者が増えて活発になり、昭和５０年代前半頃まで地域の青年(青少年)教育・青年(青少年)活動となり、若者の文化やスポーツ、地域づくりの活動として発展してきました。

平成に入ると社会様相の変化と相俟って、少子化、関係機関や組織団体等の統廃合、後継者不足などにより久喜市も青年(青少年)教育・青年(青少年)活動が縮小、停滞し、今日に至っております。

そこで久喜市社会教育委員協議会では、令和２年度から５年度にかけて標記の件について、現状把握や課題分析、方策等にまとめ、この度提言致します。

なお、標記に係る資料収集並びに現地調査にあたってご回答頂いた久喜市役所各課、関係機関、団体の皆様には多大なるご理解とご協力を賜りました。

併せて、「学校側から視る高校生対象の青少年教育・活動の推進について」のアンケート調査に対して、久喜市内の県立高校５校の管理職を含む先生方から今日の高校生の意識や言動、要望等についてご助言を賜りました。

□ 回答箇所は次のとおりです。

―　分析・課題・方策の詳細については、別添をご参照ください。

１	市役所各課	８課（環境課、教育委員会指導課・生涯学習課・文化財保護課、市民生活課、健康医療課、人権推進課、子ども未来課）
２	図書館	４館（市立）
３	郷土資料館	１館
４	体育館	２館（総合体育館、Ｂ＆Ｇ海洋センター）
５	プール	３館（アクレ、Ｂ＆Ｇ、温水プール）
６	コミュニティセンター	２館（清久、くぷる）
７	公民館	８館（中央、東、西、南、青葉、森下、栗橋、鷲宮）
８	児童館	１館（鷲宮）
９	文化会館	３館（久喜、菖蒲、栗橋）
１０	ふれあいセンター久喜	１館
１１	社会福祉協議会	１　（久喜市）
１２	全体的に　（ 上記１～１０までの中で ）	
１３	青年会議所	１　（久喜市）
１４	商工会	１　（久喜市）
１５	観光協会	１　（久喜市）
１６	ボーイスカウト	１
	ガールスカウト	１
１７	令和５年　二十歳の成人式実行委員	２７名
１８	久喜市内県立高校５校教員の代表	１２名（１５名中）

□ 現状と課題　　・・・　詳細については別添をご参照ください。

１　青年・青少年向けの事業が多い機関、団体等

① 子ども未来課　　８事業

② 社会福祉協議会　　１４事業

③ ボーイスカウト・ガールスカウト　　２４事業

④ ふれあいセンター久喜会議室利用の青少年育成団体　　１３団体

２　青年・青少年向けの事業を実施している所がかなりあるが、高校生対象など年齢限定の事業は極めて少ない。

３　参加対象で「青少年が含まれる」事業では、中高年は多くの方が参加されるが、若者は少ない。

4　青少年の参加が振るわない要因

① 情報の質・量の不足　―　知名度、広報等の扱い度
若者の意識や要望

② 事業に係る人材不足　―　スタッフ、ボランティア
事業に対応できる専門職員
特に青少年に近い年齢層

③ 青少年に特化した事業不足　―　年齢層に応じた参加しやすい講座

④ 関係機関等との連携不足　―　特に中学校、高校

⑤ 関わり度不足　―　特にアフターフォロー

⑥ 開設の曜日・時間帯の限定　―　土・日曜日、平日の夜

⑦ 会場不足　―　会場数、使用料、使用時間帯

※ 二十歳の成人式実行委員は、今まで市内の青少年向けの事業に・・・

＊参加した　２６％　参加しない　４４％　分からない　３０％

＊主催者名を殆ど知らない

＊参加しなかった理由は・・・　殆どが知らない
興味・関心が無い

※ 高校側からの助言（抜粋）

① ボランティア活動に参加したい生徒はたくさんいるが、高校生が参加できる事業の内容や時期を把握していない。

② 地元の活動に参加する経験が少ないため、高校生になって地域行事に参加することができず、地元愛や人との関わりも減っている。

③ 学校への周知が少なくて、情報不足となっている。

④ ＨＰに掲載されていても生徒が事業を知らなければ、生徒はＨＰを先ず見ない。

□ 方策　・・・　詳細については別添をご参照ください。

1　情報の質と量

① 紙ベース、PC、ＬＩＮＥ等の情報提供があるが、目的に応じて青少年に広く伝わりやすい手だてを行う。

② ○○だより等の一隅に、その機関や団体が青少年向けに活動している事業を紹介する。

③ 青少年を取り巻く環境の中で、彼らが何を求めているのか調査や対話を進める。

④ 関係機関や施設が連携して、市民や青少年の要望を取り入れた事業を進める。
⑤ 何回かに分けて、ＳＮＳ等で事業を知らせる。
⑥ 小中学生は親の理解度が重要なので、行政や教育の分野で計画的・継続的に情報を提供する。
⑦ 関係小中高校と連携して事業を進め、事業の様子を映像等で残し、次年度以降各校で活用できるシステムづくりを整備する。

※ 高校側からの助言（抜粋）
① 参加できる事業や地域での活動の周知について、告知をＳＮＳ、申し込みをＱＲコード等にする。
② ＳＮＳによる勧誘を行う。
③ 事業に関する情報発信は１回だけでなく、何度も周知する努力が必要である。
④ 各事業所からの参加案内が、学年主任まで下りてこない。広報やＨＰの案内だけでなく、直接学校に参加依頼をすることも有効である。
⑤ 高校生のニーズは何なのか、何を望むのか、調査をすると良い。
⑥ 事業を考える段階で、高校生を対象にアンケート調査を行うと良い。

2　事業に係る人材
① 地域学習で観光ボランティアと青少年の交流の場を設け、郷土愛を育成する。
② 郷土学習で久喜市の偉人・文化・歴史などの資料や講師を行政や関係機関、団体、観光協会などで支援、協力する。
③ 高校生や大学生を小中学生対象の事業で、ボランティアスタッフとして活用する。
④ ボランティアとして参加する中高生や大学生の活躍の場を増やし、後継者を育成する。
⑤ 高校生の時にボランティア活動に参加されて、その時の感動や達成感、充実感から社会福祉協議会の職員になられたなど、中高生時代の印象はその人の人生観や職業観、人間関係の糧となる。
⑥ 体験と交流を重ねることでコミュニティの輪が広がり、目的等も共有されるので、参加者の中からその後ボランティアとして、又スタッフとなる方も生まれる。
⑦ 専門職から講習を受けたい。
⑧ ２０～３０歳代が抱える諸問題について専門家を招き、講演や講習会

を開催する。― リカレント教育、将来の年金、ひきこもり、ニート等

3　青少年に特化した事業

① 参加者が少なくても意識して、青少年向け事業を実施する。そのためにも、中学校・高校・関係団体等との連携を普段から密にしておく。

② 高校生や大学生対象の事業は、県立５高校や平成国際大学と連携して、進路や就活体験、イベントも考えられる。

③ 進学や就職を自ら考えたり、直接役立つ技術獲得の事業をしてほしい。

④ 高校生を対象とした事業をしてほしい。

⑤ 中学時代の体験が高校からの言動に活かされるので、自己啓発に目覚め、多感な中学生が興味関心を惹く事業を進めてほしい。

⑥ 青少年の関心を惹き、心をくすぐるようなテーマや名称を設定する。

⑦ 青少年の関心事を探り、テーマを決めてアピールする。

⑧ 若手の講座開設のために、若手の運営委員やスタッフを入れる。

⑨ 民間カルチャーセンターとタイアップして、講師を紹介してもらう。

4　関係機関等との連携

① ゆうゆうプラザのサポート制度を利用して、青年もサポーターとしてゆうゆうプラザに参加する援助を進めて欲しい。

② 事業に協力者やボランティアを採り入れると、担当職員の負担が減る。また事業の継続性、参加者の交流が深まる。

③ 青年を対象としたセミナーを行政に働きかけて、コミュニティセンターや図書館が実施するようにする。

④ 文化会館等の利用団体とタイアップして併設の図書館をオープン化し、青少年が行きやすくなる工夫や事業を進める。

⑤ 図書館５館（県・市）で連携し、巡回で青少年の意欲関心、利用度、事業満足度などを定期的に調査して、各図書館が事後に活かす。

⑥ コミュニティセンターに対する中高生や大学生の意識や利用度喚起のため、学校と連携して進めてほしい。

5　関わり度

① 参加して得た学びや体験、コミュニティ等の感動をその場限りにせず、参加者が自分から活かすような支援体制を整備する。

② 参加者の中で引き続き活動を続ける人もいることを想定して、事業終了後もアフターフォローすることが若者の街づくりを進めていく。

③ 事業に関わる活動をしている既存の青少年活動団体等が、講師やスタ

ッフとして支援してもらうと、その団体が若者にとって身近なものとなる。また団体への加入などが進む。

6　開設日

① 月に一度、土曜日や日祝日の午後に、青少年向けの講義・講座や球技、スポーツを実施してほしい。

7　会場

① 会議などでその施設を利用する複数の青少年対象の団体が、年に数回合同して活動する場を設ける。

② 小中学校や高校への貸出しを学校との連携の下に計画的に行い、学生が親近感を持つ施設に育てる。

③ 年に１回程度「スポーツフェア」などを開催し、体育館を無料開放するなど、様々なスポーツ紹介を行う。

④ 「自主学習スペース」を増やすなど、一層の開放を進める。

□ コミュニティセンターの活用について

1　社会教育委員から

① 青少年育成団体や機関等と計画的・優先的にコラボして、事業を進めると、若者が集まりやすいコミュニティの場となる。

② 公民館時代にあった「学習機能を残す」ということなので、貸館だけにならない手立てを実行する。

③ １年後の令和６年にコミュニティセンター利用者アンケートを取り、市民に活用の実態やメリット・デメリットなどを広報などで、広く市民や青少年に知らせることが重要である。

2　高校側からの助言（抜粋）

② 多くの生徒が市内各総合支所やコミュニティセンター（旧公民館）を利用した経験がない。

③ コミュニティセンターの活用方法等について知らない生徒が多いので、利用を促すチラシや広報活動を定期的に行う。

— 春日部市の高校では利用方法について、全校生徒分のチラシを配布している。

④ 勉強やレクリエーションの場で活用できると良い。

⑤ 部活動で活用できると良い。

— 高校で「部活動地域移行」が進んでいるため。

⑥ 定期考査時期の前に、コミュニティセンターの利用を勧める。
⑦ 利用内容や利用曜日・時間帯を、ＳＮＳ等で周知する。
⑧ 無線 Wi-Fi 等のネットワーク環境を整備する。

□ 今後のまちづくりと高校生向けの青少年教育・活動（高校側からの助言抜粋）

1　行政

① 幼少期からの地域活動への参加が、青少年の参加継続に繋がる。
② 地域の自主性を尊重しつつ、内容や進め方などを地域住民と一緒に取り組む。
③ 学校の代表として生徒会や高校生と意見交換をする場を設けて欲しい。
④ イベント等を企画されるのは高校生には有効だが、教職員の働き方が問題となっているので、教職員の負担にならないようにしてほしい。

2　関係機関

① 職場体験ができると高校生は有り難いし、認知度が上がる。
② 部活動の生徒とコラボして取り組むのも良い。
　　― 運動部、文化部に応じて
③ 上記１行政の④と同じ

3　団体

① 部活動単位で参加しやすい行事・事業を実施してほしい。
② 体験活動の実施などで認知度が上がる。
③ 関係団体等とのタイアップ事業を実施してほしい。
　　― その種目に参加するチーム（部）
　　スタッフなど運営に参加する個人
　　作品の出品　　制作のサポート

4　その他

① 若者は綺麗な施設、コンセントをや Wi-Fi など充実した施設を望む。
② 高校生は参加や利用だけでなく、企画やスタッフとして運営のお手伝いもできる。情報発信と周知の徹底で協力体制を構築する。
③ 長期休業前のすきま時間に学校行事として久喜市のＰＲを行う。学校の文化祭でのコラボを進める。（学校に要望すると良い）

まとめ　　～ 青年・青少年にとって「魅力ある久喜市」に ～

若者にとって魅力ある街とは、

① 自分の想いや考え、行動が認められ、活かされる街

② 学びの場、出会いの場、コミュニティづくりの場が満ち溢れる街

③ 学業や仕事で通う学校や職場への愛着が育まれる街

④ ふるさと久喜に誇りが持て、明るく、活気のある街

そして、魅力ある街づくりのキーパーソンは中学生である。中学生（事業内容によっては小学生高学年を含む）は、文化・芸術・スポーツ・ボランティア等、様々な活動に対する関心や意欲があり、感受性も豊かとなっている。また、自らを高め、他人との繋がりを深めるとともに、社会奉仕への欲求がある。

そこで、

1　市内中学校との連携・協働を強化し、市役所各課・関係部署や関係団体・サークルなど事業関係者がタイアップして学校訪問する。そして生徒に直に呼びかけ、話し合い、参加率を高める。　―　高校も同様

2　市内中学生が事業体験をすれば、その事業内容も理解しているので、県立高校への事業案内の協力者となる。また、情報提供者として、近隣市町から通学する学生の参加も見込まれる。

3　中学・高校生は参加事業の活動中、その事業に関係・協力する団体やサークルのスタッフと交流したり、事業終了後に主催・担当者から団体等の紹介やアフターフォローがあると、学んだこと体験したことを活かし、発揮していく。また、後継者育成にもなり、人々の輪が繋がる。

4　学校・地域・社会のウエルビーイングを進めるため、中学・高校生が関わった地域での活動体験や試行錯誤した内容などの事例紹介を積極的にアピールする。

5　世代間の垣根を越えた活動をすることにより、高齢化社会に当事者意識を持ち、魅力ある街づくりへの積極的な参加ができる若者を育成していく。

若者が目的を持って、生き生きと活動できる地域コミュニティづくりを進めていく。